

き
な
こ
が
教
え
て
く
れ
た
こ
と

手^て
登^ど
根^{こん}

桐^{とう}
矢^や

「恭花^{きょうか}、ぶっさいく」

あれ、この言葉は誰に言われたんだっけ？

「恭花、起きなさい」

お母さんの声だ。今日は、七月六日。日曜日。父は出張で明日帰ってくる。今日は十時から三時までおでかけだ。私は、しっかりと準備し、車に乗った。

そして、あることについて考える。

私が通う中学には嫌いな人、旭^{あさひ}がいる。旭とは中学で初めて出会い、すぐに意気^{いき}投合^{とうごう}し、友達になった。でも二年になって小学校からの友達（好きな人）、哉^{かな}兔^とと三人で一緒のクラスになってから、旭は変わった。

私に嫌がらせをしてくるようになった。教科書が消えたり、哉兔と話そうとしたら旭が邪魔^{じやま}したり、金曜だって、私が久しぶりに哉兔と話していたら「ねえ、聞いて。昨日、恭花が悪いことしたのに、謝りもせずに帰ってしまったの」と目の前に私がいるのに、変なことを言いだした。悪い事もしていない。す

るわけがない。でも、哉兎も「旭に謝った方がいい」と言う。

その時、朝の会が始まったので、私は何も言わず、自分の席に戻った。今までで、一番最悪な金曜だった。月曜は、何を話せばいいのだろう。このままだと、哉兎と友達じゃいられなくなる。だから一刻も早く、嫌がらせを終わらせないといけない。けど、考えれば考えるほど、どうすればいいか分からない。「何？ その顔？ 嫌いな人でもできた？」旭のことを考えていたら、お母さんが意表をつくことを言い出した。

「なんで、分かったの？」

私がそう言うとお母さんは少し考えてから話した。

「覚えてる？ きなこがうちのペットになったばかりの頃、あなたときなこ、いつも喧嘩していたでしょう。その時の顔にそっくり」

そんなことあったっけ？

きなことは、しゃべったことがある。きな

こが亡くなる約三ヶ月前から、亡くなる日の朝までよくしゃべった。

そう、きなこは人の言葉をしゃべることができる猫だった。きなこはいつも私をからかい、私はいつもきなこをからかい返す。きなここと話せるのは、とってもうれしかった。スマホの使い方を訊いてきた時もあった。でも結局、途中で飽きていたし、なぜ訊いたのかは未だに謎だ。

そういうえば明日は、きなこの命日だ。でも今は、嫌がらせをやめる方法を考えないと。そう思って、あれこれ考えたけど、どれもしっくりこないままおでかけは終わった。

外は、暑く、蟬の声が早くも夏の訪れを告げていた。蟬も嫌がらせをしたり、されたりするのだろうか。

自分の部屋に行き、スマホを触る。今日はなんとなく、嫌がらせをやめさせる方法を考える前に、きなこの写真が見たいと思った。

きなこが笑っている写真、ご飯を食べてる写真、きなこが亡くなる二日前に撮った私のひざの上で寝転んでるきなこの写真。写真を見ると、一年前のことが蘇^{よみがえ}ってくる。

私は、ずっと一緒だったペットと、話すことができた。それはとっても楽しくて、夢みた이었다。だから気づかなかった。夢は長く続かないという事を。そして、その日は訪れた。けど、きなこに「さようなら」を言うことは、できなかった。

「あれ、これなんだろう？」

写真を見ていると知らない動画がでてきた。こんな時期に動画なんて撮ったっけ？
と思いながら画面を見ると、そこにはきなこの顔が写っていた。

そういえば、スマホの使い方、最後に教えたのは写真や動画の撮り方についてだった。

きなこが、最後に私に伝えたかったこと……。

私は、動画を再生した。

きなこが、いすにちょこんとすわっている。

「うん、かわいい。きなこは動画を撮って欲しかったのね」

お母さんの声？

そうか、お母さんにはスマホのパスワードも教えてるから、動画も撮れたのか。

きなこがお母さんからスマホを取る。

「あっ、きなこ。お母さん料理してるから、そのスマホは壊さないでね」

少しして、スマホに天井が写る。

「恭花、元気か？」

きなこの声だ。顔も写っている。

「恭花がいつ、この動画を見てるか分からないけど、俺はもうすぐ……。でも、俺、怖くないんだ。だって、生まれ変わるって教えてくれただろ。だから、生まれ変わったら俺、また恭花の猫になるんだ」

一人だからか、きなこはずっとしゃべり続けている。

「あと昨日、思い出したんだけど、俺達が出会ったばかりの頃、何回も喧嘩けんかして、いつも恭花が泣いていただろ。そんな時に、おばあちゃん、『ありがとうって、言うとなんかでも仲良くなれる』と教えてくれた事が、あったよな。そしたら恭花が、『ありがとう。きなことのおかげで私、ペットを大切にするって簡単な事じゃないって分かった。えつとそれから、きなことのお腹はもう触らない。だからえつと、私と仲直りしてくれる？』って、言ってる。このことがあってから、俺たちは仲良くなったんだよな。俺、恭花に出会えてよかった。じゃあ、もうそろそろ動画をとめるよ。別れ話は、できるだけ短くしたいんだ。猫だからな。じゃあな、恭花」

「なんで？ まだ、まだ話していいのに。まだ話してほしいのに。もったいなこの声聞かせてよ。最後まで、時間なんて忘れて話そう。まだ消えないでよ。私、まだ「さようなら」言えてない。」

私の瞳から涙がこぼれる。

ねえ、まだ一緒にいたい。近くできなこを感じたい……。

最後に、もう一回きなこが写る。

「恭花、泣いているのか？　恭花ブサイクだな」

この言葉。そうだ、思い出した。この言葉は前、写真を撮った時にも言われた。

それは、私のひざの上できなこが寝転んでいる時のこと。

「俺が病院にいる時、恭花泣いてたろ？　あの時の恭花、ブサイクだったな。恭花、ぶつ

さいく」

いつもの様に、きなこが私をからかってきた。こうなったら。

「きなこも、病院で注射されている時うるさかったよね。あの時のきなこ、ブサイクだった。きなこ、ぶつさいく」

私はきなこをからかい返す。

「「ぶつさいく」」

私ときなこの声が混ざる。私達は、声を上げて笑った。いっぱい、いっぱい笑った。

とても大切な記憶きおく。なんで忘れていたのだろう。

「恭花、ぶっさいく」

何それ。でも、それがきなこらしい。

「変に格好つけているきなこの方が、ブサイクだよ。きなこ、ぶっさいく」

私は、そう言いながら涙をぬぐい、笑みをこぼした。

「さようなら」を言う必要なんて、最初からなかった。だって、これからもきなこは、私の心の中で生き続けてくれる。そして、いつかまた、生まれ変わったきなこに会うのだから。

今まで悩んでいたことが、嘘みたいに吹っ飛んでいき、希望が生まれる。きなこは私が忘れていた「人生にはいつも希望があり、人は誰とでも分かち合える」ということを思い出させてくれた。解決策かいけつさくはまだ無い。

でも、きっと大丈夫。だって私は、仲が悪かったきなこと、親友になれたのだから。

ありがとう。きなこ。

明日からまた、私の希望に満ちた毎日が始まる。

心の中で、止まっていた針が動き出す。

明日の私は、どんな希望を作りだすのだろう。